

発達に遅れのある子どもの言語指導

～T君の話しことば指導の工夫～

目次

I	テーマ設定の理由	23
II	研究仮説	24
III	研究内容	24
1	子どもの発達	24
(1)	発達の遅れた子どもとは	24
(2)	子どもの発達のすじ道	25
(3)	知能の発達とことばの発達	25
2	話しことば習得のための理論的背景	26
(1)	話しことばの意義	26
(2)	言語発達遅滞について	26
(3)	言語発達遅滞の原因と分類	26
(4)	ことばの発達(表)	27
(5)	言語発達の条件	29
(6)	言語発達の過程	29
(7)	言語指導の基本的視点	31
(8)	発達の遅れた子どもの言語指導の一般原則	31
(9)	障害児を指導する基本的指導体系	31
(10)	言語障害の種類及び指導方法	32
3	実態把握について	33
4	研究事例	34
(1)	T君のプロフィール	34
IV	授業 実践例	37
1	題材名	37
2	題材設定の理由	37
3	児童の実態	37
4	指導目標	37
5	指導計画	38
6	本時の指導	38
7	評価	39
8	授業研究会の記録	39
9	授業風景	41
V	研究の成果と今後の課題	42
	《参考文献》	

浦添市立浦添小学校教諭

下地裕子

発達に遅れのある子どもの言語

～T君のはなしことば指導の工夫～

浦添市立浦添小学校教諭 下地裕子

I テーマ設定の理由

誰かと生活を共にするとき、“ことば”はとても重要な働きをする。“ことば”は、人と人とが通じ合うコミュニケーションのための大切な道具だからである。

毎日の生活の中で、子供は身近にいる人の“ことば”を自分にむけられたメッセージとして聞き、ことばの意味を物事や状況や経験などと関連づけて理解しようと試み、自分が社会の一員として生きていくために必要なものとして、“ことば”の働きを学んでいくのである。

T君の場合、知能の発達の遅れた子にありがちな、語彙が少ない、発音不明瞭で聞き取りにくい、単語で話すことが多い、ことばがつかないなど“ことば”の発達の遅れがめだつた。

ことばに遅れのあるT君は、ことばを声に出して音韻通りに発音することが未熟なため、ことばがうまく相手に伝わらず、意志の疎通が一方通行のためうまく集団の中へとけ込めないことが多々ある。教師の意志は通じるが、集団の中ではT君の意志が通じないために泣いたりわめいたりして手がつけられない状態になることもしばしばである。

このような状況の中で、T君にはっきりした話しことばを習得させのびのびと日常会話ができるようにさせるためには、T君の実態を把握し発達段階をしっかりとおさえた上で、T君の興味・関心に基づく学習指導の工夫が重要であると考えた。

ところが、これまでの指導を振り返ってみると

- ① 生活単元を中心に対応したがややもすると教科の学習面、基本的な日常生活の徹底ばかりに目が向きT君の実態をしっかりと把握していなかった。
- ② 児童が何を求めているのか、何が必要なのか、それはどんな手だてによって達成できるのかという具体的な方策が不十分だった。

ましてやことばの能力を高めさせるための教師の指導技術の未熟さもあり、ただ、形式的に口形や発声指導をただでT君にあった具体的な言語指導の工夫などがなされていなかったことが反省される。

ことばを育てる、言語力を高めるということは、日常生活で体験する行動や動作を、絵やことば、歌あそび、ごっこあそびと結びつけて指導することにより遅れた子のことばの指導の効果がかりになるのではないかと考える。

どんな年齢の、どんな発達レベルの子でも、行動することが好きである。ことばの指導も行動的で“身体を使った指導”がより効果的ではないかと考え、生活経験と結びついた動作遊びや、模倣遊びを通した指導の方法を工夫することにより、子どもが意欲的に学習し言語力がつくのではないかと考え本テーマを設定した。

II 研究仮説

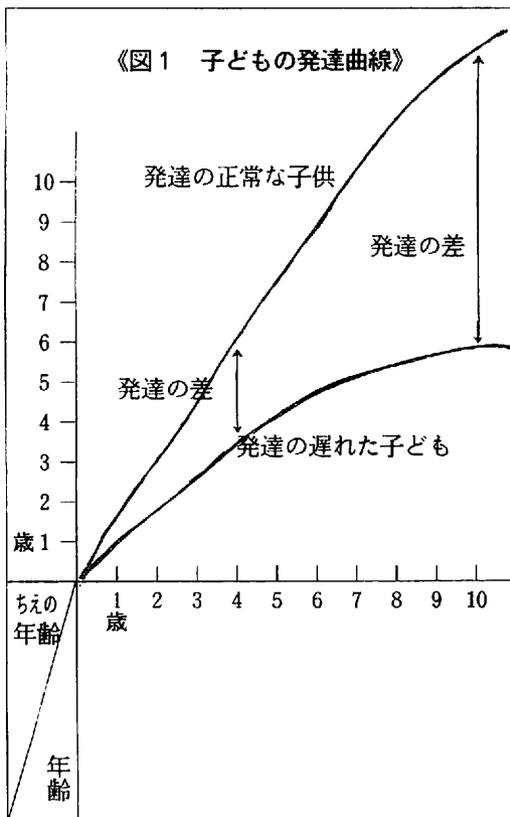
T君の言語力を高めるには、T君の実態を把握しT君の興味・関心のあるものを教材化し、より多くの具体物を使った指導法を工夫したり、語彙拡充のための経験学習や多くの感覚をとり入れた指導法を工夫することにより、生活に結びついた話しことばを理解させ、習得させることができるであろう。

III 研究内容

1 子どもの発達

(1) 発達の遅れた子どもとは

次の図は、発達の遅れた子と正常な子の知能の発達の様子をグラフで示したものである。



発達の様子を見てみると、正常な子どもは一歳のとき、およそ一歳のちえ、二歳のとき、二歳のちえがのびていくが、発達に遅れのある子は、少しずつ遅れていって、年相応になっていかないのである。

「たいていの子どもは、4～8歳ぐらいの間に、具体的経験やからだを使って考える方法から、ことばを思考の道具として使いこなすようになる。ことばに障害のある子どもは、この時期の、ちえの発達が、阻止される。このため、複雑な事態の正しい意味を理解していく方法に欠け、学習にも障害が生じ、社会性に不足し、ひいては、仲間からはずれていくのである。

ちえ遅れが、はっきりあらわに示されるようになっていくのは、この4～8歳の年齢である。それは、ことばをじょうずに使いこなせるようにならないためといってもよいだろう。《図1》のように両者の発達の差は、4～5歳ごろから次第に顕著なものとなっていくのである。だから、発達

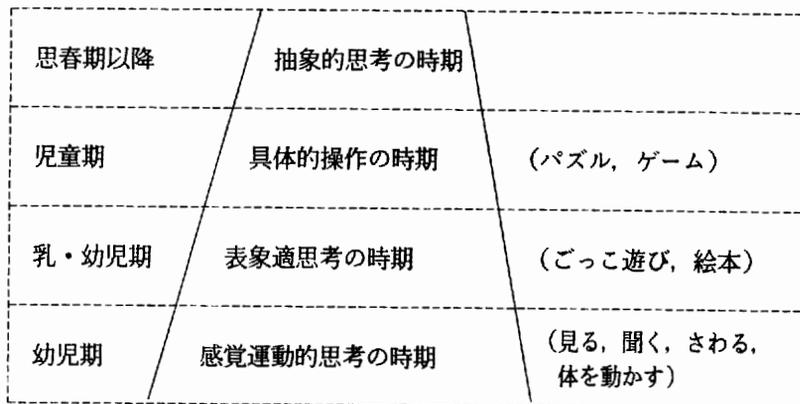
の遅れた子どもの障害とは、ことば＝認識力の障害であるということになる。そのため、この子どもたちの教育内容は、ことばの指導が中核とならざるをえない。つまり、ことばの指導によってのみ、子どもの発達を進歩させ、正常な方向へと高めていくことができるといっても過言ではない。」と柚木馥氏は言っている。

ならば、子どもの考える能力の実態がどの程度であるかを正しく吟味・検討し、ふさわしい言語指導の方法でもって子どもに迫ることが大切であろう。

(2) 子どもの発達のおし道

子どもの基本的な発達の原理についてピアジェは図2のように示している。

図2 子どもの発達のおし道



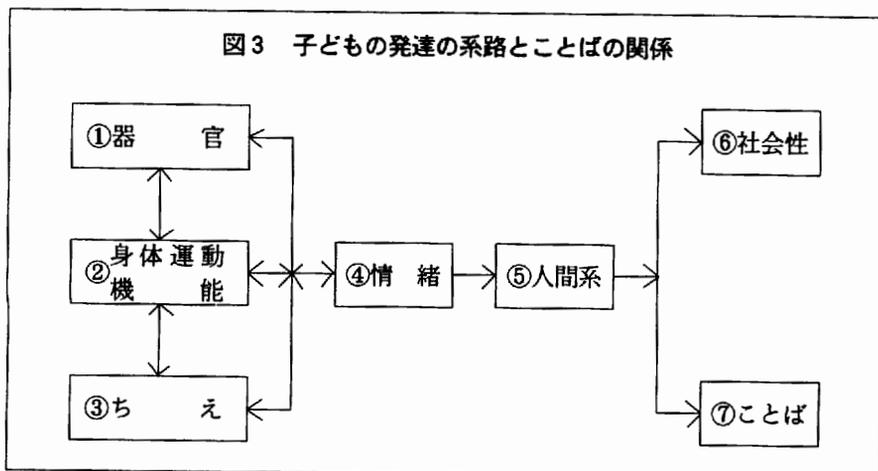
柚木 馥『言語指導の遊びと教具』

* ピアジェによると、「発達の遅れた子は、感覚運動的な時期が長く、また、この段階では言葉の発達も頭の中で想像するという「表象」というのはたつきも十分ではない。つまりことばが出るようになるまでには全体の感覚機能が、ある段階まで発達していなければならないし、また、ことばが出ることによって思考能力が高まり、抽象概念も育っていくということになる。」

したがって、ことばの発達を促す指導の基底には、身体運動機能訓練や基礎的認知能力の訓練が必要となろう。

(3) 知能の発達とことばの発達

人間と他の動物との大きな違いは、人間がことばを獲得し、ことばで思考を深めていることである。人と人との意志の伝達・交換（コミュニケーション）の手段としてことばは獲得され発達してきた。ことばの発達と諸能力との関係を図3に示した。



柚木 馥『言語指導の遊びと教具』

図3は、子どもの①口腔器官、②身体機能、③ちえが一定のレベルまで育って、④情緒が発達し、⑤対人関係が生じ、その結果として、⑥社会性と⑦言葉が育つことを示している。①-⑦までのいずれかに欠陥があっても言葉の発達に遅れが生じる。

このようにみえてくると、ことばの発達は、身体的・心理的・社会的な諸要因が関係し合っていると言える。ことばの指導は、このような知能全体の発達を促す総合的な指導の中で効果をあげることができると言える。実際にことばの指導をする場合には、子どもがどの段階にいてどの能力が欠けているかを把握し、それぞれの児童の実態に対応して、指導内容や方法・形態を工夫していくことが必要である。

2 話しことば習得のための理論的背景

(1) 話しことばの意義

話しことばは、普通、意志伝達の道具として考えられている。しかし、これは単なる情報伝達の道具としてつかわれているのではなく、思考、コミュニケーション、人を動かす、感情の表現、自我の表出、人間関係の調節という社会適応の観点から大変重要な機能をもっている。

このような大切な機能をもつ話しことばは、理解言語と表出言語に分けることができる。即ち、受信と発信である。受信は可能でも発信できないと一方通行同様、人間間にコミュニケーションの確立は考えられない。二つが同時に機能した時にコミュニケーションは確立されるのである。

このような意味から、ことばのもつ機能は社会生活を営む上で大きな意義がある。

(2) 言語発達遅滞について

社会生活を営む上で重要な意義を持つ話しことばが、各年齢にふさわしい言語発達段階まで達せず、ことばを理解したり、話したりすることができず、言語全般に遅れを示す状態を言語発達遅滞という。

言語発達遅滞児は、語彙が少ない、文章が繋がらない、場にあった話しができない、構音障害、話しのリズム異常、音声障害、ことばが上手に話せない、相手の言うことが理解できない等の障害がある。また、そのほか話しことばが全くでない言語障害も多く見られ、言語の各方面に多様な障害を現す。

(3) 言語発達遅滞の原因と分類

言語発達遅延を引き起こす要因は多種多様であり、柚木馥氏は、発達遅延の原因と分類を次のようにまとめている。即ち、「①身体発育不全言語遅滞 ②心因性言語遅滞 ③難聴性言語遅滞 ④精神薄弱による言語遅滞 ⑤脳性まひによる言語遅滞 ⑥自閉症による言語遅滞 ⑦微細能損傷による言語遅滞 ⑧特発性言語遅滞」の8つに分類している。

以上の分類からすると、言語発達遅滞児の原因と障害は千差万別である。言語発達遅滞児の障害の原因が多種多様同様、その指導法もいろいろありよりきめ細やかな指導の工夫をしなければならない。

(4) ことばの発達

表1 年齢段階別話しことばと言語の発達

項目	年齢	6 か月	1	1 1/2	2	2 1/2	3	4	5
言語理解と基本的伝達		ほぼ笑み、笑い	いけませんかわかる。 禁止がわかる。 バイバイやいい子かわかる。	ごく簡単な言語指示を動作や身ぶり・抑揚の動けで理解する。 身体部位3わかる。 身近なものの絵を5指す。	絵本の絵を10さがせる。 1〜2指示にしたがう。 身体部位がわかる。	絵を15くらい指せる。 2〜3指示にしたがう。	絵を25枚指せる。 絵の名前を20くらい言う。	色が4〜5わかる。 犬や猫はどんなことをするの……に答えられる。	目にふれるほとんどの物がわかる。
音の発達		母音(バブバブの中で)5子音	バブバブやレロレロの中で母音と9子音。 音をまねる。 音節や短い単語をまねてくり返す。(意味は知らない)	p, b, m, h, wがかなりはつきり出る。	絵本の絵を10さがせる。 1〜2指示にしたがう。 身体部位がわかる。	t, d, n, k, g, ngが単語の中で出る。	y, f, vが単語の中で出る。	sh, zhが単語の中で出る。	s, z, r, ch, jが単語の中で出る。
聴覚的記憶再生			音をまねる。 音節や短い単語をまねてくり返す。(意味は知らない)	単語をいくつつかまねて言う。(意味は知らない)	絵本の絵を10さがせる。 1〜2指示にしたがう。 身体部位がわかる。	数字2けたが再生できる。 物の名前二つが記憶できる。	数字3けたを再生できる。 聞いた通りに物を4記憶できる。	10まで数がとええられる。 4まで物が数えられる。 数字を4けた再生できる。	
語彙数(表現)			1〜2語 対象語	10〜20語 対象語と動詞を少し言う。	50〜250語 名詞・動詞 形容詞	400〜500語 名詞・動詞 代名詞(ボク, ワタシ)	800〜1,000語 代名詞(あなた, お前, ぼくの) 形容詞, 動詞(不十分) (数を伴って→お菓子三つネ)		未来形で言える。 副詞
品の長さ				単語で表現する。	2語文 単語・句 簡単な文章	3語文	4語文		
発声や伝達の特徴		ほぼ笑み、叫び 鼻をならす バブバブ、キーキー泣く	バブバブ レロレロ おうむことば	さそう。指す。 喃語・単語を少し言う。	単語・句 簡単な文章		句 文が長くなる。	複雑な構文が使える。	
発声や伝達の方法		反射・楽しみ	楽しみ	注意をひく。	願望・依頼などの意味を持った社会的統制		社会的統制欲求の依頼	経験と結びつけられる。 情報を求める。	
話しことばの内容と型					ボクのワタシのという 所有の表示。 語彙や文法力が乏しい。		やったことを知らせる。 姓名を完全に言う。 男か女かを言う。 できごとを話す。	言語力はかなりすぐれる。 語彙に制限がある。 ほとんど日常生活に不 質問によって情報を求める。 自由なく言語力がつく。	ありがたい、どうぞ、 お願いしますが使える。 ほとんど日常生活に不 自由なく言語力がつく。
会話明瞭度(%)			20〜25%	60〜75% (構音が未熟)	75〜90%	90%	90%	90%	明瞭さが目立ってよく なる。 構音の誤り(r, s)は 定みの程度。

Euttin Ilang Speech and Language Relation, 1964.

(5) 言語発達の条件

人間は、ことばの種子を生まれつきもっている。しかし、種子だけではことばが開かない。自然で適切なことばの環境が欠かせないのである。こうした環境の中にいるときにだけ、ことばが身につけられるのである。まわりの人たちの話すことばをお手本にして、習って覚えつけてひとりでは覚えるわけではない。ことばが発達する条件として、ことばを教える人たち、ことばを習う子ども、これらをふくむ環境それぞれに、次のいくつかのことがあげられる。

こどもの側の条件

- ① 健康であること
- ② 身体や運動能力の発達に特に遅れないこと
- ③ 知能が特に低くないこと
- ④ 話すのに必要な音声器官に欠陥がないこと
- ⑤ 聞き取る力に問題のないこと
- ⑥ 情緒的に安定していること

環境の側の条件

- ① ことばのお手本となる人がいて、絶えず正しいことばを自然に話しかけてあげる。
- ② 子どもの発声に反応してやり、さらに促す。
- ③ 子どもが話すことを喜び、話す必要を感じ、話すことの効力を知るような家庭環境づくり。
- ④ 豊かな生活体験ができるような環境づくり。

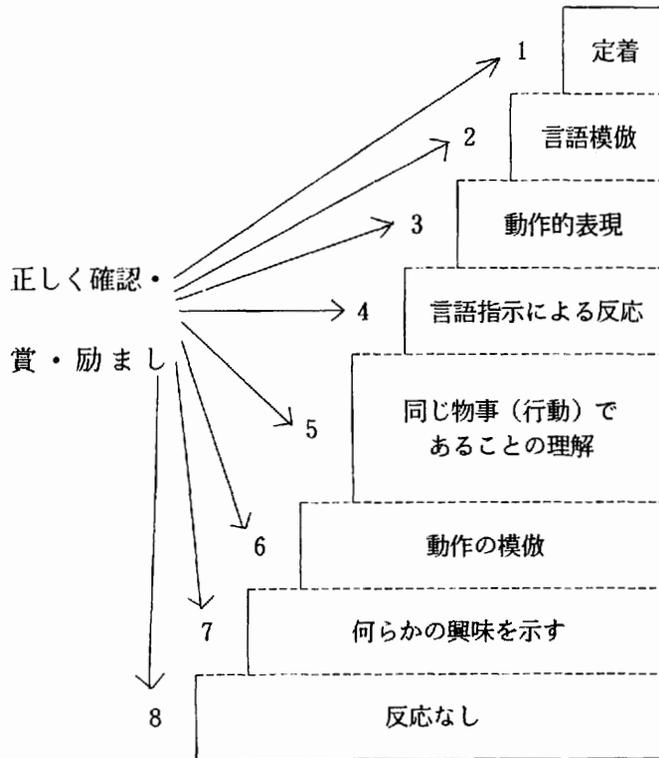
子どもには、それぞれ固有の発達段階があって一律ではないが気質的に欠陥がなく、ことばの学習ができるような環境条件が揃っていれば、幼児期後半5～6才までに発音、語、文、文章、など日本語の持つ基礎を獲得する。

(6) 言語発達の過程

子どもの言語獲得の過程は、自然にいつしか言語を獲得しているように見えるが、その過程は容易ではない。単に周りの人びとが話すことばをそのまま機械的に移しとっているのではなく、自己と環境のかかわりを通して主体的に獲得していくのである。

図4は、子どもの言語定着までの過程を表したものである。それによると、「産声」を伴って生を受けた新生児は、ただ泣き叫ぶだけでことばに対する反応は全くない。泣いて抱きとめられて、泣きやむ体験を繰り返すことによって、母親に安心して依存する関係が成り立つ。そうした母親とのやりとりを楽しむことを通じて安定した状態が保障されると、人の顔や声へ興味を示すようになる。それから、母親や周りの人びとの話しかけや動作を通して、動作を模倣するようになり、見よう見まねの学習をしていく。そのうちに、物や動作が音と結び付き、簡単な指示に従ったり、要求に反応を示すようになる。更に、簡単な質問に対し指さし等の身振りや答えるようになり、あれなに？これなに？の言語模倣ができ、何度も同じ音を繰り返すうちに、ことばが定着するのである。

図4 言語定着までの段階



柚木 馥『言語指導の遊びと教具』

このように、全く反応のない段階から、定着し表出できるようになるまでには多くの時間と親をはじめ周りの人たちの限らない愛情が必要となる。

子どもの言語発達に対しては、この発達段階を常に認識し、発達に応じた指導をすることが大事である。指導過程では、賞を与えながら、励ましていくことも重要である。こうして、ことばの獲得が可能になる。

それでは発達の遅れた子どもの言語獲得はどうなっているのでしょうか。

タウン氏は、遅れた子の言語発達について次のように述べている。「健常の幼児の言語発達と同一傾向を示し、ことばよりも身振りが、模倣よりも自発のみぶりが根底となり、何ら健常の子と変わらない言語獲得がなされている。」と報告している。

しかし、遅れた子どものことばの発達遅滞の原因は、複雑多岐にわたっているため、健常の子の言語指導と同様な方法のみでは、遅れた子の言語獲得の問題解決にはならない。発達の遅れを究明し、その子にあった細やかなステップ指導法の確立こそ発達へつながる唯一の道であろう。

(7) 言語指導の基本となる視点

発達の遅れという「厚く重い壁」にはばまれている障害をもつ子どもの言語指導を進めていく場合、次のような配慮が必要となる。

- ① スモールステップの学習方法で指導する。
- ② 子どもの発達の固有なプロフィールに着目する。
- ③ 学習の確立をめざし、指導法や教材器具を検討する。

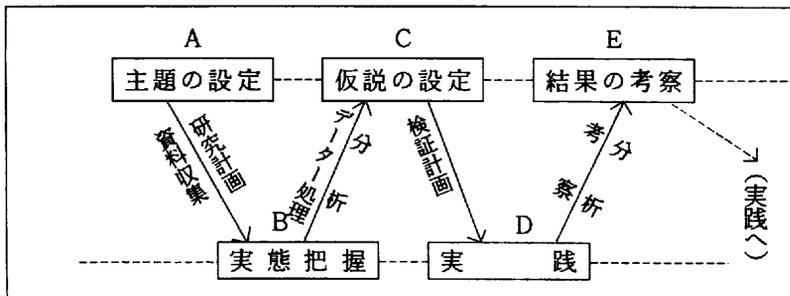
(8) 発達の遅れた子どもの言語指導の一般原則

遅れをもつ子どもの言語指導をどのような立場に立って展開するかを要約した。

- ① 子どもは、全身をぶつけ、遊び、行動することに生きがいを求めている。よってできるだけ行動・動作を中軸にすえ言語指導に取りかかる。
- ② 発達の遅れた子どもは、抽象教材を使って考えたり、判断したりすることは苦手である。よって、具体的事物を使って、具体的に行動できるようにする。
- ③ 子どもの生活経験を身辺自立を中核に、一步一步、自立能力を高めるよう、多様に繰り返し与える。
- ④ 子どもの興味を大事にしどのように展開していくか考える。
- ⑤ ことばは学習行動である。よって、よい刺激をいっぱい準備することが大切である。
- ⑥ 子どもの心身は未分化であり、ことばだけを取り出して訓練したり、ことばだけを教える学習のやり方は成り立たない。よって、できるだけ総合的・具体的な方法をとる。(トータルプッシュ方式)
- ⑦ 多くの感覚学習を取り入れてできるだけ、見たり、聞いたり、触れたり、動いたりする活動を取り上げ、ことばを育てる基礎能力の向上を図る。
- ⑧ どんなに注意力が短く、気の散る子どもでも、なんとか参加できるように、工夫をこらす。

(9) 障害児を指導する基本的指導体系

人間は社会に住む以上、相互交渉が必要となるので、それに向けた教育をするには、その子に合ったステップで「あせらず」「根気よく」最も喜んでやる行動態勢を利用して、一つずつ改善していく指導計画を作成して、教育実践に移らなければならない。更に指導計画によって指導過程での記録をとり、それを整理、統合、分化、秩序立てて次の指導計画を作成するという繰り返し、このような教育システムがちえ遅れの子どものには必要である。即ち、下記の図のように具体的な指導の手順をふむことが大事である。



福岡県教育研究所連盟『教育研究のすすめ方・論文のまとめ方』

(10) 言語障害の指導内容及び方法

① 言語障害児の種類と指導内容

種類	障害に応じた指導
構音障害	構音の指導 耳の弁別能力の改善・向上 発語器官の機能の向上 必要な場合は医療処置
音声障害	主として耳鼻科医でなされる 声の安静, 無理のない発声指導 声の衛生についての指導は言語障害学級を中心に於て行う。
リズムの異常 (吃音)	きつ音に対する対症療法 きつ音であることを認め積極的に生きる力を 養う カウンセリング 遊戯療法 対人関係の調整指導
言語発達のおくれ	全人的な発達の促進 遅れの原因となるものの究明と, それに対する指導 系統的な言語指導
難聴	きこえとことばの指導 補聴器装用 学習指導 社会成熟の促進
口蓋裂	医学的処理・発語器官の機能向上 健康の管理 構音指導 適応に関する指導
脳性まひ	(言語障害学級で指導するのは軽度の場合である) 言語発達の促進 構音指導 運動機能の向上
情緒障害	(言語発達の遅れに準じた指導)
精神薄弱	(言語発達の遅れに準じた指導)

② 指導の方法

ねらい	指導の方法
弁別訓練	・楽器音・社会音, ことば等の実態の音やレコード, テープ, 絵カード文字カードなどを使って, 音あそびや聞き出すあそびをする。
呼吸練習	・しゃぼん玉, 紙ふぶき, ろうそく消し, ぞうのはな(笛)など息を調節してあそぶものや, 笛, ハーモニカ, 鍵盤ハーモニカ等を使い, 呼吸の質と量の調整力を高める。
構音器官の筋肉運動	・吸う, 吹く, かむ動作の伴うあそびや教材を使って, 発音に必要な筋肉の運動機能を高める。
発音指導	・舌, くちびるなど構音器官の正しい位置や動き, 息の使い方等を指導する。(ウェーファス)
発音の習得練習	・習得した音を, 単語や文の中でも使いこなせることができるように絵カード, 文字カード, かるた, 紙しばいなどを使って系統的に行う。
コミュニケーション態度の確立	・まねっこあそび, 山びごっこ, 劇あそびなどをおして説明をする, 感じたことをいう, 意見をいう, 質問をする, 答えるなどの力を身につけ, 実際場面で使えるようにする。

3 実態把握について

(1) 実態把握の重要性

指導に先立ち、まず、児童の実態をできるだけ早く具体的に把握することが必要である。そのことによって現在の子どもの心身の発達状態や学習状況がわかり、子どもが受けてる障害や心身の要求を把握することができる。そして子どもの将来を展望しながら発達課題を見出し、発達課題に即した指導内容や指導方法を工夫し学習効果をあげるための手だてとするために実態把握は必要である。

(2) 実態把握の方法

① 生育歴の面から

子どもの成長過程に親をはじめ家族の養育態度などが、どのような影響を及ぼしてきたかを知ることにより指導の手がかりを得ることができる。

② 諸検査の面から

知能検査、発達検査などの心理学的立場から、子どもの発達してきた筋道や到達度に対して、優れている部分、劣っている部分などを診断し、遅れている部分の発達を促していくのか、指導の手だてを見つけ出すものとして最も重要である。

③ 行動観察の面から

行動観察は児童を知る最も重要な手がかりである。どんな重度の障害児でも彼らが示す行動には必ず理由があり、それは成長、発達に導くものである。その子が何に興味・関心を示し何を得意とするのか、また、何ができるのかなどを詳細に観察記録し、それを指導の手がかりにしていくことが大事である。

④ 医学的診断から

運動制限はないか、治療中の病気はないか、健康を維持する上で担任として配慮しなければならぬことはないかなどの情報は、ぜひ知らなければならないことである。また、専門医からの指導助言を得ることも重要である。

⑤ その他

これまで関わってきた者などから情報を得ることも大事である。

以上、述べたいろいろな角度からの情報を、総合的に、または部分的に、組み立て検討することによって、子どもの実態をより深くとらえることができる。

そこで、T君の発達をつまづきを正しく把握するため日常的な行動観察による資料収集、標準化された知能テストや発達診断テスト等を実施した。

4 研究事例

(1) T君のプロフィール 生活年齢 7歳8カ月

① 生育歴

※ 出産の状況……父(33歳) 母(32歳)の子

吸引分娩で呼吸困難であり。出産時体重3104g
水痘症の疑いで、2歳のころ手術をうける。

※ 家庭環境……現在、母・兄(高校3年生)の3人家族である。

母親は昼間勤めているが教育熱心である。
兄はT児の障害をよく理解している。

② 諸検査

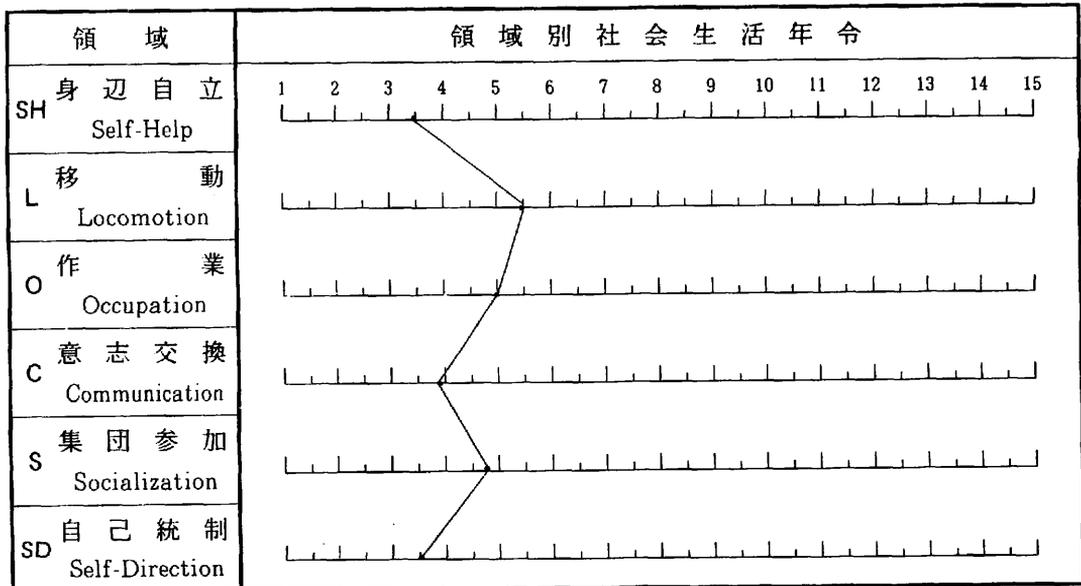
暦年令 7歳8カ月

田中ビネー 5歳2か月

SM社会生活能力検査 4歳2か月

ITPA言語学習能力検査 4歳2か月

SM社会生活能力検査



全体的に遅れが見られるが、特に身辺自立、意志交換、自己統制は落ち込みがみられる。

構音検査……カ行の発音がタ行に変わる

濁音の発音が不明瞭

③ 行動観察

興味・関心	ことば	社会性	運動機能
<ul style="list-style-type: none"> ・ものさしを使って線を引きたがる。 ・マジックを使うのが好き。 ・テレビ・テープレコーダーが好きで、指で操作できる。 ・えんぴつのしんがとがっていないと使わない。すぐえんぴつけずりでとぐ。 ・時々、指をくわえる。 ・音楽が好きで、オルガンをひきたがる。 ・ぼんやりしたり、人のすることを見る時に口を半開きにする。 ・「学ぶくん」をやりたがり、授業始めに「学ぶくんやる」とよく言う。 ・歌が好きで、今習っている曲を口ずさむ。 ・わなげゲームの表を作り、名前を書いてやろうとする。 ・はさみを使うのが好き。 ・折り紙でいろいろなものをおろうとする。 ・ボールをける遊びが好き。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「ボール」「給食」「学ぶくん」など単語が多い。 ・「かえして下さい」とか「やって下さい」丁寧語もたまに使う。 ・あきらかにそうでないときに「ちがう」と強く言う。 ・「ガギグゲゴ」「ダヂツデド」が、はっきり言えない。 ・「おはよう」のはが聞き取りにくい。 ・「先生とよぶ時、つい「おかあさん」と言う。 ・「これ」「こっち」と指をさして言う。 ・「ももたろう」の「も」とか「けむし」の「け」など文字を書くとき教師に確認する。 ・返事は「うん」が多い。 ・課題がすむと「できた」と言う。 ・教室から外へ行くと「バイバイ」と手を振りながら言う。 ・「これやる」「こち書く」と言う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・犬やにわとり、うさぎなど動物が好き。 ・列に並ぶとき、前の人をおしのけたり、手でさわったりする。 ・先生や仲のいい友だちを見るとニコッと笑う。 ・自分から、友だちの方へかけ寄っていく。 ・おおぜいの人が並んでいる所へ、後ろから入っていったりする時、しりごみして入ろうとしない。(朝会以外で) ・よびかけないと、視線をそらしたままで話しをしたり、聞いたりする。 ・教室の前の廊下を歩いている人を、いきなりさわったり、追いかけたりする。 ・いつも口をあいたままなので、よくよだれをたらす。 ・1日に1～2回ほど少量の大便をおもらしする。 ・教師の催促がないと集団へ入りにくい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・走る時、足の運び方が小さく、(低い)小さな物にもつまづいて、ころんでしまう。 ・サッカーボールをけることができる。 ・階段を降りる時、片足交互には降りることができず、右足を一段おろしたら、左足もおろしそろえてから、次の段へ下がっていく。 ・歩いたり走ったりする時必ず、途中座って靴をなおす。 ・「走る→踏みこむ→手をついて跳び箱に乗る→着地する」の跳び箱をとぶ運動ができる。 ・シャボンすべり台を上手にすべれる。 ・鉄棒にぶらさがることができる。 ・ブランコにのって自分でこげる。 ・補助輪つき自転車にのることができる。

以上、生育歴、諸検査、行動観察等の結果から、全体的に遅れのあることがわかる。中でも言語の遅れが顕著に現れている。

T君の言語理解は、日常生活の中でよく使われる指示については、ある程度理解できるが表出語は少なく発音も不明瞭である。T君は話を中心にした学習には興味をしめさず、口を半開きにし、ほおづえをついてぼんやりしていたり、じっと座ることができずうろうろ動き回っていることが多い。しかし働きかける者がいれば相手に関心を示す。

特に、「学くん」やテープレコーダーの操作が大好きで、具体物を利用しての学習には喜んで参加する。

このような事実をふまえて、授業実践にのぞんだ。

IV 授業実践例

合科的学習指導案

平成5年11月26日(金) 2校時

浦添市立 浦添小学校なかよし学級

授業者 下地 裕子

1 題材名 やおやさん

2 題材設定の理由

発達に遅れのある子どもにことばを獲得させるには、生活経験を豊富にすることが大切である
と考える。そして、その生活経験ができるだけ音声言語を通して数多くコミュニケーションな
されるように配慮することもまた大切であろう。

そこで、今回は一般的に子どもの好きな「やおやさん」を取り上げることにした。身の回りの
ものの中で、子どもが一番興味のある食べ物の名前、中でも季節がら実りの秋にふさわしく、ま
た、栽培学習とのタイアップを考えて野菜の名前から始めることにした。

日頃、食べている野菜の名前だが、意外と不確実な部分が多かった。そこで、T君の興味関心
のある歌やリズム遊び、ごっこ遊びを通してことばの表出を促しながら語彙の拡充とはなしこと
ば習得の定着を図りたいと考えこの題材を設定した。

3 児童の実態

- 中度精神薄弱，言語障害。
- 内言語はあるが，言語表現が不明瞭。
- 身のまわりのことはだいたいできるが排便処理が不十分。
- リズム感があり，歌ったり踊ったりが好きで喜んでやる。
- 平仮名の読み書きはだいたいできる。
- 1年生程度の文は読めるが，意味理解は困難である。
- 絵を書いたり，ハサミや定規を使って作業することが好きである。
- 人の話はだいたい理解できるが，相手へはことばがはっきりしないため，ほとんど通じない。

4 指導目標

- (1) 歌，リズム遊び等を通してことばを豊かにし，集中して学習に取り組むことができるように
する。
- (2) あらゆる場面で話ができるように場なれをさせ，人とのことばのやりとりのマナー（話し手
と聞き手の役割）を体験することができるようにする。
- (3) 正しい発音を弁別する力や聞く耳を育て，発声訓練をすることにより，正しい発音を身につ
けさせ，のびのびと日常会話ができるようにする。

5 指導計画

- 1次……パネルシアターをつかって野菜の名前を練習する。……………2時間
 2次……レタス・サラダ菜を植える。……………2時間
 3次……絵カードや模擬野菜を使って遊びながら野菜の名前を練習する。……………2時間
 4次……野菜の色ぬり・切りぬき・型押しをする。……………2時間
 5次……屋台（やおや）をつくる。……………2時間
 6次……八百屋さんごっこをする。……………2時間本時 $\frac{1}{2}$
 7次……野菜サラダをつくる。……………2時間

6 本時の指導

(1) 本時の仮説

児童の身近な生活体験をことばと結びつけ歌あそび、ごっこあそびをすることによりことばの数が増え、自分の思いをことばで伝えることができるであろう。

(2) 本時のめあて

- ・ 野菜の名前がわかり言えるようにする。
- ・ 簡単な買い物物の応答ができるようにする。

(3) 準備するもの……テープレコーダー、パネルシアター、やおやさんの屋台、実物の野菜、絵カード、絵人形、文字カード、エプロン、三角巾、買物かご、野菜入れのザル、お金カード

(4) 本時の展開

過程	学習内容および活動	指導上の留意点	準備
導 入 5分	1 はじめのあいさつをする。 2 「こぶたぬきつねこ」を歌う。	・できるだけ明瞭なことばでいえるようにする。 ・メロディーにあわせて動作化する。	ニコニコマーク パネル板 絵カード テープレコーダー
展 開 35分	3 お店と店員の絵人形をはって、学習のめあてを知らせる。 4 「やおやさん」の歌を歌いながら野菜の絵をはっていく。 5 「やおやさんごっこ」をする時の「おみせの人」と「おきゃくさん」の様子を話し合う。 6 役わりを決めて「やおやさんごっこ」をする。	・「やおや」について復習する。 ・始めに言いにくい野菜をもっていき、くりかえし練習する。 ・買物の応答のしかたをまとめる。 ・「売る人」「買う人」は交代で演じる。	絵人形 文字カード 本物の野菜 手作り屋台 エプロン
ま と め 5分	7 「やおやさんごっこ」の学習についてまとめる。 8 次時予告をする。 9 終わりのあいさつをする。	・買物したものの名前が正しく言える。 ・はっきりしたことばで言える。	

7 評価

- (1) 楽しくあそびながら野菜の名前を覚え、言うことができたか。
- (2) 買い物の応答のしかたがうまくできたか。

メモ

8 授業研究会の記録

(1) 授業者の反省

- ・ごっこ遊びを通して会話のしかたを体験し、日常生活でも応答の仕方を役立てればという思いで本時に望んだ。
- ・T君の好きなリズム遊びを取り入れ学習の意欲づけをした。
- ・マンツーマンなので、どう45分間、学習を持続させようかと苦心した。
- ・やおやさんの歌を何度か練習したので、学習パターンを覚え自分が先導になって歌い学習が進めやすかった。
- ・通級の子が屋台作りを手伝ってくれたので助かった。
- ・5分早く終わったので急拠、今日の出来事を書く作業を入れたが、やはり意欲を見せなかった。

(2) 意見感想

① 児童の動き

- ・普通の子に比べると、やはり発声が弱い。
- ・学習の意欲反応は大変よかった。
- ・絵と文字を対応させて野菜の名前をよく覚えていた。
- ・「おみせの人」「お客さん」という役割をちゃんととらえ、買物する応答ができていた。
- ・すなおな面があり、教師との対応がうまく流れていた。
- ・目標2の「あらゆる場になれさせる」は、子どもが以外とリラックスした雰囲気でも学習していた。
- ・たまにしっかりしたことばがあったので反復練習で訓練することにより、より上手になると思う。

② 教師の働きかけ

- ・45分がスムーズに流れ退屈する場面がなかった。
- ・導入の時、少し集中に欠ける場面があったが音楽が流れると引き込まれていった。
- ・子どもの目の高さになって話しかけていた。
- ・小道具がたくさん用意され、興味関心をそそった。
- ・子どもへのことばかけも、あやふやの言葉は繰り返し指導していたところはよかった。
- ・ピーマンが最初言えなかったが、後で言えるようになっていた。
- ・まとめで指導案の中のない、書く作業を入れていたが子どもがあまりのらなかったで、言葉の練習を繰り返しやると、よかったのではないか。

③ 教材教具

- ・生の野菜を使用したところはよかった。
- ・ダンボールの屋台の工夫は手作りの良さがあって作る段階から子どもが参加しているという点で意義があった。
- ・教具を豊富に用意し、導入の位置からうまく使いこなしていた。

(3) 指導助言

成果

- ・教師の視線が、常に子どもの高さにある授業実践であった。
- ・パネルシアターを使った、学習の進め方は子どもの興味関心をもたせるのに効果的であった。
- ・実物の野菜を屋台に並べさせたのは、本人がやおやさんになった気分を味わわせよかった。
- ・たくさんのことばを指導する時、知っているものから先に取り上げ、徐々に語句をふやしていくやりかたはよかった。

- ・ことばの指導のポイント
発音ができる→意味の理解→字形が照応できる。
- ・ことばを身につけるには繰り返し練習することが大事である。
- ・繰り返しは単調ではなく変化をもたせたものでなければならない。

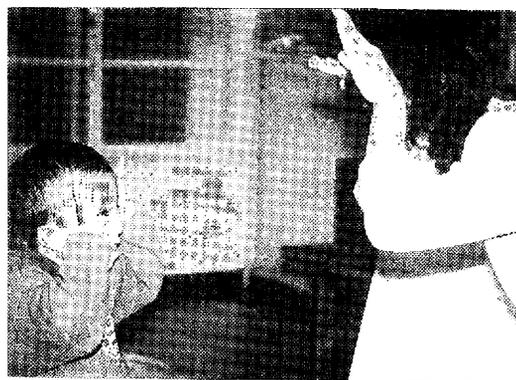
以上の視点から今日の授業は

- ・歌、文字カード、絵、ごっこあそび……など七つの変化のある授業形態であった。
- ・遊びの場面で思考の場をうまく引き出していた。
- ・役割分担をして意欲的に自分（子ども）が主役になるようなもち方を工夫していた。
- ・学習過程の工夫として。
 - ① 学習課題が変化を持たせたものであった。
 - ② 5つの学習教材を（絵、音楽、パネルシアター、実物、意欲づけのカード）を適材適所に盛り込んで使っていた。

課題

- ・音楽にのせた発声練習用のテープを使う場面があると、より効果的である。
- ・姿勢が崩れ授業中児童がじっと座ることが難しいようなので、今後の指導の強化事項である。
- ・「カ行」「ガ行」の練習のために、意欲的に「カ、ガ」の入った野菜のものを加えるとより効果的である。
- ・視聴覚機器を使って、「あいうえおの歌」「みじかい詩」などを暗唱させるとより心情まで深めることができる。
- ・テープを使って、自分の声や先生の声を聞くという体験もさせるとより効果が期待できる。

9 授業風景



楽しくリズムあそび（こぶたぬきつねこ）



歌に合わせて野菜の名前を覚える（パネルシアター）



「いらっしゃいませ」「なにがいいですか」



「きゅうりとピーマン……」を買いました



「今日の買い物は……」

V 研究の成果と今後の課題

成 果

- 1 多くの参考文献や諸検査等を実施活用することにより、T君の実態を把握し、指導も見通しを持って進めることができた。
- 2 視聴覚教材を活用し、興味をもたせることにより、子どもの生き生きした表情が見られるようになった。
- 3 子どもの日常生活のできごとを教材化し、体験させる中でこれまで言えなかったことばを使おうとする傾向が見られた。
- 4 絵カードや文字カードを遊びや学習の中に取り入れることにより「もっとやる」という自己欲求をことばで表現する様子が見られた。
- 5 より多くの具体物を活用すると、子どもは集中して学習に取り組むことができ、いかに学習指導法の工夫が大切であるかを再確認した。

課 題

- 1 言語を中心におきながら、全体的な発達をめざした具体的な年間計画の作成と実践。
- 2 自発的な話しかけや、場に合った話しかけができるようになるまでの指導過程の工夫。
- 3 学校生活の中で、他の子と学び合えるいろいろな場面の設定の工夫。
- 4 言語力を高めていくための指導法のさらなる追求。

〈主な参考・引用文献〉

『ことばの遅れと障害の日常指導』	森上 史朗・柚木 馥	共編	教育出版	1990
『ことばの遅れた子の言語指導』	須藤 貢明・岸 学	共著	〃	1983
『言語指導の遊びと教具』	柚木 馥	編著	学習研究社	1993
『発達障害児の授業法』	中澤 和彦	編著	〃	1993
『言語指導教材』	磯部 久子	著	〃	1992
『特殊学級の授業楽しい50のアイデア』	宮崎 直男	編	明治図書	1990
『ことばの発達を促す手作り教材』	長岡 恵理	共著	学苑社	1992
『遊びによることばと発音の育て方』	大熊喜代松	編著	日本文化科学社	1991
『遅れのある子どもの指導法入門』	位頭 義仁	著	川島書店	1987
『障害児教育小辞典』	佐藤 泰正	編	協同出版	1986
『教育研究のすすめ方・論文のまとめ方』	福岡県教育研究所連盟編		第一法規	1981